

「小学校英語指導法」における授業実践力向上のための取組

The approach to improve English practical skills in elementary school English teaching method

福島 治子

Haruko FUKUSHIMA

要 旨

3年前期に開講される「小学校英語指導法」の授業における授業実践力向上のための取組をまとめた。英語が苦手な学生も多い中、その実態を踏まえながら、小学校英語における授業実践力を身に付けさせるために、2年生後期の「小学校英語Ⅰ」での取組から一貫性をもたせ、「小学校英語指導法」の授業に取り組んだ。

クラスルームイングリッシュを使用した単元を通した模擬授業を全学生ができるよう、授業1つ1つ、また授業外での指導を積み重ねた。指導の中で特に、模擬活動の指導案作成、模擬活動の実践、模擬授業の学習指導案の作成、模擬授業の実施については、授業での全体への指導とともに、授業外で指導案の添削をし、模擬活動や模擬授業の発表のためのリハーサルを行い、発音や活動の流れ、教師役の動きなどについても指導をした。その結果、全受講生が、模擬授業の発表をすることができた。また、振り返りとして、その発表を撮影した自身の教師役の姿を視聴し課題をとらえ、その課題については教科書を参考にしながら、具体的な改善について述べることもできた。2年生の「小学校英語Ⅰ」で、初めてクラスルームイングリッシュを使った授業のときの学生と、クラスルームイングリッシュを使いながら模擬授業を実践した学生とを比較すると、大きな成長があり、実践力を身に付けた姿をみることができた。

1. 「小学校英語指導法」における授業実践力を育成するための取組

「小学校英語指導法」の授業において、限られた時間の中でコアカリキュラムの項目をすべて扱い、かつ指導技術をあげていくための方策として、「小学校英語Ⅰ」の授業段階から授業実践に必要な英語運用力を身に付けさせ、さらに「指導法」の授業で、授業づくりを軸に必要な知識を解説しつつ、指導技術を身に付けさせるコースデザインをし、取り組んでいる。

小学校英語を指導するにあたっての英語力は、一般的な英語力とは質的に異なる英語運用力が必要とされる。クラスルームイングリッシュを中心とした小学校の英語の授業に必要な英語力を身に付けるためには、教室の指導の場面を授業で繰り返し設定し、指導者として具体的に英語を使おうとする体験が学生にとって有効な学習法になると考え、小学校英語でよく使用されるゲーム、歌やチャンツ、絵本等を取り入れた活動のグループ発表、模擬活動、模擬授業の実施へとつないでいる。コアカリキュラムに基づいた小学校英語の指導法において、教室で実際に教えることを模擬的に体験させる中で、「児童に伝わりやすい英語」「児童にとって楽しく、分かりやすい活動」等について、学生が理解、実践できるようになることに力を入れ、取り組んでいる。

本学では、2年後期に「小学校英語Ⅰ」を、3年前期に「小学校英語指導法」を学習する。その学習で身に付けた知識や技能、実践力をもとに、3年後期の小学校教育実習や採用試験、そして小学校での授業を行っていくことになる。「小学校英語Ⅰ」、「小学校英語指導法」の授業時間だけで、小学校の英語科の授業を行うに十分な力がつくことはあり得ないが、学生の実態を踏まえ、少しでもしっかりとした英語の授業実践力をつけるため、令和6年度に「小学校英語指導法」において行った取組をここに報告する。

(1) 「小学校英語指導法」の授業概要

令和6年度、教科書として「コア・カリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識」（編著者：村野井仁 2018 発行所：株式会社大修館書店）、「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」（文部科学省、2017）、「Q & A 小学校英語指導法事典—教師の質問112に答える」（編著者：樋口忠彦、高橋一幸、加賀田哲也、泉恵美子、2017、発行所：教育出版株式会社）を使用した。

15回の授業内容の概要は次のとおりである。

表1 「小学校英語指導法」の授業概要

1回	小学校における学習指導要領（目標・内容・指導計画）小・中・高等学校の連携と小学校の役割
2回	活動を考える：コミュニケーションの目的や場面、題材の選定（教材研究）
3回	活動を考える：発達段階に応じた児童のインプットとアウトプット
4回	模擬活動の実践と振り返り：児童の発話を促す教師の指導
5回	模擬活動の実践と振り返り：児童の発話を促す教師の指導
6回	授業の位置付けを確認する：学習到達目標の活用と年間指導計画、単元計画
7回	授業を考える：言語習得のプロセス、コミュニケーション能力とは、4技能5領域の指導方法、ICTの活用、ALTとのチームティーチングの在り方
8回	授業の準備をする：学習指導案の作成
9回	授業の準備をする：学習指導案の作成
10回	授業の準備をする：教材、教具の作成
11回	授業の準備をする：指導と評価（パフォーマンス評価等）の一体化
12回	模擬授業（グループ1～3）
13回	模擬授業（グループ4～6）
14回	模擬授業（グループ7～8）
15回	授業の振り返りと学習指導案の再構築

「第1回」の授業で学習指導要領に掲げてある目標や指導内容、指導計画、小学校の役割等を知り、「第2回」・「第3回」の「活動を考える」で、コミュニケーションの目的や場面、題材の選定（教材研究）や発達段階に応じた児童のインプットとアウトプットについての学習後、与えられた10分程度の活動の指導案を考える。この過程で、与えられた活動は、「聞く」「話す」「読む」「書く」のどの領域の活動であり、活動の目標が何であるかをしっかりと理解したうえで、指導案を考えさせている。「第4回」・「第5回」の授業でその活動を模擬的に実践させる。「第6回」の授業で、現在倉敷市で採択されている教科書「Junior Sunshine 5」を用いて、学習到達目標と年間指導計画、単元計画について学習をし、「第7回」の授業で、2年次に学習した第二言語習得論をもとに、言語習得のプロセス、コミュニケーション能力とは何か、4技能5領域の指導方法、ICTの活用、ALTとのチームティーチングの在り方を、教科書や資料等を用いながら、扱う。「第8回」・「第9回」の授業で、「Junior Sunshine 5」Lesson 8の本時案の学習指導案を作成させる。「第10回」授業で、各個人が作成した本時案をグループごとに持ち寄り、グループの指導案を仕上げ、教材・教具等の作成を行う。「第11回」の授業では、授業の振り返りについて学習するとともに、指導と評価（パフォーマンス評価等）の一体化についての知識を習得する。さらに、「第12回」から「第14回」、合計3回にわたって「模擬授業」の実施をする。「模擬授業」は、1つの単元の1時から8時までの各授業を8グループが1つずつ担当し、1人7・8分程度の担当時間で授業実践をする。最後の「第15回」の授業で自らの授業映像を見るとともに、他の学生からのコメントも参考にしながら、授業を振り返り、模擬授業及び学習指導案について課題及びその改善について考察をする。

授業の概要は上記のとおりであるが、この中で学生に授業実践力を身に付けさせることに特に力を入れて取り組んでいる。「第2回」から「第5回」の授業の取組、及び「第8回」から「第15回」の授業について、詳細に述べていく。

(2) 第2回から第5回授業「活動を考える」、「模擬活動の実践と振り返り」の概要

「NEW HORIZON Elementary English Course 教師用指導書 みんなが英語を好きになる 小学校英語の活動レシピ R2」(著作者：東京書籍株式会社. 発行所：東京書籍株式会社. 2020)に掲載されている活動のうち16種類の活動を、また、「Junior Sunshine 5 Teacher's Manual 解説編」(編著者：開隆堂出版編集部. 発行所：開隆堂出版株式会社. 2020. P.7-P.10)に掲載されている4種類の活動、合計20種類の活動をPDF形式で授業資料としてUNIPAにアップした。

40名の受講生をペアにし、20組に20種類の活動を、組ごとに異なる活動を割り当てた。ペアの学生は、一人が活動の指導案を、もう一人は発表を担当することとした。

まず、活動の指導案を担当学生が、教員に提出し、教員は添削をして学生に返却する。指導案担当学生は、添削された指導案を発表担当学生に渡す。発表担当学生は、その指導案をもとに発表の練習をし、発表日までに教員に発表のリハーサルを見てもらい、指導を受けるように指示した。

「NEW HORIZON Elementary English Course 教師用指導書 みんなが英語を好きになる 小学校英語の活動レシピ R2」(著作者：東京書籍株式会社. 発行所：東京書籍株式会社. 2020)、及び「Junior Sunshine 5 Teacher's Manual 解説編」(編著者：開隆堂出版編集部. 発行所：開隆堂出版株式会社. 2020. P.7-P.10)から選んだ20種類の活動は、次のような考えに基づいて選んだ。

まず、小学校から高等学校へと続く学習を通して、学習指導要領が小学校段階での定着を求めている「アルファベットの大文字・小文字」に関わる活動、ドリル的なペンマンシップの練習にならないようにするための活動を選んだ。また、「数字・曜日・月日」に関する単語は、頻繁に使用される重要な語彙であるので、これらの語彙に楽しく触れることができるような活動や、学習指導要領において小学校で指導する「600～700程度の語」、色や食べ物などの名詞や様子や気持ちを表す形容詞、動詞などを身に付けることができる活動を選んだ。

次に、「聞き取って即座に動作反応する」活動、「前置詞(in, on, under)を使って場所を示す」活動、「買い物ごっこで「聞く」「話す」力を付ける」活動など、小学校学習指導要領で取り上げられた文法事項や4技能5領域に係る活動、教科書で扱われている「サイモンセズ」、「キーワード・ゲーム」、「ミッシング・ゲーム」等のゲームを選んだ。

模擬活動の指導案作成担当の学生は、日本語のゲームの手順を示した模擬活動の内容をもとに、自分が担当するゲームの指導案を作成する。指導案には、「活動のねらい」及び4技能5領域のどれに係る活動かを記述させ、「児童の活動」、「指導上の留意点」、「準備物」の項目に活動内容が指導案から理解できるよう、クラスルームイングリッシュや英語での児童との応答も記入するよう指導した。

教員が添削した指導案をもとに、発表担当の学生は模擬活動の練習をする。発表前には、必ず教員が指導をした。

「模擬活動の実践と振り返り」の手順は次のとおりである。

「教師役」担当(1名)以外の学生は、「児童役」になる。「教師役」の学生が模擬活動を行う前には、必ず、「どんな題材」を扱い、「どのような力」を身に付けさせるための「4技能5領域のうちのどの活動」かを他の学生に伝える。1人約8分程度の模擬活動を行う。発表後に目標を達成できる活動になっていたかどうかを、発表学生に振り返りのコメントを言わせ、児童役の学生は4つの観点—「児童が理解しやすい英語を使用していたか」「ゆっくりはっきり発音、繰り返し、言い換えなどをしていったか」「児童の反応や理解度を確認しながら進めていったか」「活動の目的を達成することができたか」—で、1つの観点につき1～3点で評価をした。総合得点10点以上がA、8点以上がB、7点以下をCとして総合評価欄に記入させた。

これは、各活動を評価するとき、4つの観点を意識するとともに、自分が発表するときにも常にこ

の観点を意識しながら実践できるようにするために行った。

(3) 第8回から第11回授業「授業の準備をする」の概要

岡山県倉敷市内の小学校に教育実習に行く学生が多いため、倉敷市が採択している小学校英語の教科書、「Junior Sunshine 5. KAIRYUDO.」のLesson 8 What would you like ? (ランチメニューを考えよう) を扱うことにした。この単元は、食べ物や飲み物を扱い、さらに4技能5領域のすべての活動を含んでいる。このため、学生は5年生の英語のレベルを知り、「聞くこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」「読むこと」「書くこと」すべての活動にふれることができる。

この単元は8時で構成されているので、受講生を8つのグループに分けた。1時から8時まで、それぞれを1グループが担当する。

まず、この単元の1時から8時までのそれぞれの目標を踏まえ、目標を達成するための活動について、解説をした。模擬活動で扱ったゲーム等も例に挙げながら、具体的なイメージを持つことができるようにした。学生は模擬活動の指導案等を参考に、本時案を各自で作成しその本時案を提出した。その後、各自の本時案をもとに、グループで模擬授業をするための本時案の作成をグループ協議を通して行った。

模擬授業(グループ)の本時案を添削後、学生に返却した。その折、授業での模擬授業の発表は45分すべてをすることは、授業時間の制約があり困難であるため、それぞれの本時案において、どの範囲を発表するのか、それをグループの人数で分割すると、どこからどこまでを1人が担当するのかを伝えた。

以前の授業評価アンケートの中に、「グループで作成したものを評価すると、グループ作成時に熱心に取り組んだ学生とそうでない学生が同じ評価であるのはおかしい」という意見があり、指導案は個人作成の段階のものを評価の対象としている。個人が作成した指導案の評価は表2のルーブリック評価を活用した。

表2 「模擬活動」の指導案に係るルーブリック評価表

40点	30点	10点
指導案の書き方を踏まえて作成できる	ほぼ指導案の書き方を踏まえて作成できる	指導案の書き方(形式)を理解していない
クラスルームイングリッシュを適切に使用できる	クラスルームイングリッシュを使用できる	大文字・小文字、表記や記号に誤りがある
目標を達成するための4技能5領域を考慮した活動であり、活動の難易度の配列が適切である	目標を達成するための4技能5領域を考慮した活動である	目標を達成するためには不十分な活動である

(4) 第12回から第14回授業「模擬授業」の概要

模擬授業の時間は、発表のグループ、コメント担当のグループが各1グループずつで、残りの学生が児童役になった。1グループの持ち時間は、約30分、1人の担当時間は6分程度である。指導案の中の主に「展開」の部分を発表させた。各グループの発表前に、学習指導案に記述した「目標」を他のグループの学生に伝え、発表をした。発表終了後に、「模擬授業評価表」を使って、すべての学生が評価をした。評価の観点は4つ—「クラスルームイングリッシュを適切に使うことができる」「絵カード等、配慮ある準備ができ、使用が計画的である」「児童の動きを見ながら授業を進めている」「活動を円滑に進め、目標を達成できた」—である。各項目の得点は1～3点。合計点10点以上がA、8点以上がB、7点以下をCとして総合評価欄に記入させ、コメント担当のグループから一人一人、1分コメントをさせた。さらに、教員も模擬授業についての助言をした。模擬授業の評価は、表3のルーブリック評価表を活用し、成績に反映させた。

--	--	--

第12回から第14回の模擬授業をビデオカメラで撮影した。垢り返りの授業で、まぜ、各学生が自自

また、学習指導案についても、楷写授業の振り返りや教科書「O & A 小学校英語指導法事典—教

単元日枠はもとより、各授業時間の日枠をしっかりと意識した学習内容になるよう、さらに4技能5

光二日曜

5時	目標：誰かのためのランチメニューを考え、食べ物や飲み物の名前を言い、読むことができる。 【聞く】 【話す】 【読む】
6時	目標：ランチメニューを作るために、買い物をするすることができる。 【聞く】 【話す】 【読む】 【書く】
7時	目標：作ったランチメニューが誰のためか、どの食べ物・飲み物を選んだか発表する。 【聞く】 【話す】

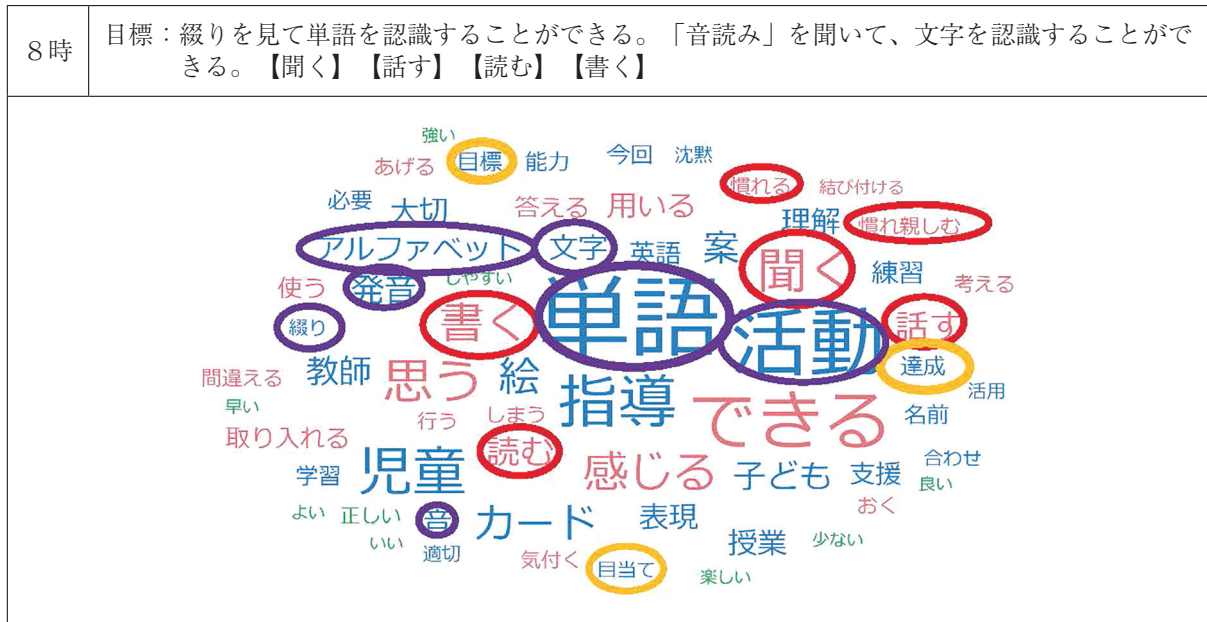


図1 「模擬授業」の学習指導案に係る学生の振り返り（AIテキストマイニングによる分析：ワードクラウド 単語出現頻度）

学習指導案を作成する際、指導案で扱う各授業の目標及び目標を達成するための言語活動について、指導案作成までの指導法の授業で、繰り返しふれてきた。図1に、各授業の「目標そのものに係る単語」に黄色の楕円形の囲み、各授業で扱う「目標に係る単語」に紫色の囲み、各授業で扱う「言語領域に係る単語」に赤色の囲みを入れた。すべての授業において、学生は授業目標や目的意識を持った言語活動を行い、その意識をもって振り返りをしているのが分かる。

表4 「模擬授業」の学習指導案に係る学生の振り返り

単元目標： ・食べ物や飲み物の言い方、値段や欲しいものをたずねたり答えたりする言い方を理解することができる。また、絵や音と結びつけながら単語を読むことができる。 ・特別な人へのランチメニューを発表することができる。 ・他者に配慮しながら、特別な人へのランチメニューを発表しようとする。	
1時	目標：いろいろな食べ物や飲み物の表現を理解し、ランチメニュー作りのための発表およびやり取りのイメージを持ち、そのための表現に慣れる。【聞く】【話す】 《学生の振り返り》 ○聞く・話す活動が中心に構成されているが、リピート回数が少ないため、児童が単語に慣れる機会が不足している。表現に慣れることを目指した授業では、聞く・話す活動を増やし、発音練習を何度も繰り返す必要がある。児童が自然に言葉に慣れ、発音を定着させる環境を整えることで、授業の目標が達成される。改善として、発音練習を重ねることや、児童が発音を通じて言葉の意味を自然に獲得できるような工夫が重要である。 ○指導案では、児童同士のコミュニケーションの場面が少なかったため、英語を使った実践的なやり取りが必要である。子ども同士が英語で交流する時間を設けることで、主体的な学びを促すことができると考える。活動内容を工夫し、ペアワークやグループ活動を導入することが効果的である。 ○英語が苦手な児童への声かけやサポートが不足していた。指導案に簡単な単語や日本語を使った補足説明を加えるべきだった。今後は、理解が難しい児童に配慮した支援を積極的に取り入れ、英語に対する苦手意識を軽減する工夫が必要だと感じた。

2時	目標：いろいろな食べ物や飲み物の表現を理解し、言えるようにする。【聞く】 【話す】
《学生の振り返り》 ○児童が親しんでいる教材を使用することで、興味を引きやすくなる。絵本やCDなど、既に知っている語彙を含む教材を取り入れることで、児童が内容に対する理解を深めることができる。 ○指導案は、目指す学習目標に基づいて作成されるべきである。児童に習得してほしい表現を明確にし、活動を通じてそれらを繰り返し練習させる大切さを一層感じた。	
3時	目標：いろいろな食べ物や飲み物を買うときの数字・値段表現を知り、表現に慣れる。【聞く】 【話す】
《学生の振り返り》 ○指導案では、文字と音声の一致を意識した点はよかった。特に、3桁の数字やチャンツでスペルを提示することで、児童が英語に親しみやすさを感じられる環境が整えられた。しかし、目標の明確化が必要で、「話すこと」や「聞くこと」の重点がブレないように、指導案をさらに精緻化する必要がある。今後は、各活動が目指すスキルを明確にし、流れをより一貫したものにしたい。 ○表現の定着に関して、学習した表現をしばらく使わないと児童は忘れてしまうため、意識的に使うことが必要であると感じた。指導案では、初めに使った語彙・表現を再び使用する活動が不足していたため、学習内容を適宜挿入し、定着を図ることが重要である。また、児童が自発的に発言する機会を増やすことで、学んだ表現を実際の会話の中で活用する能力を育てることができる。今後は、児童の意欲を引き出しながら、定着を促す授業作りを目指したい。	
4時	目標：ランチメニューの食べ物や飲み物の栄養素を考え分類し、表現に慣れる。【聞く】 【話す】
《学生の振り返り》 ○今回の指導案では、児童の活動が多く含まれていたものの、活動の必要性が明確でなかった。特に食品の分類分け活動では、児童が単語の理解を深めるための会話が不足しており、活動の目的があいまいだった。今後は、活動の前に「なぜこの活動を行うのか」を明示することで、児童の理解と興味を高められると考える。 ○指導案では、児童が聞き取れなかった場合の支援策が欠如していたため、今後はその点を改善する必要がある。例えば、授業中に児童の理解度を確認し、必要に応じて日本語での補足説明を行うことが重要である。また、CDを流す際には確認のために再度流すことをルール化するなど、児童が安心して学べる環境を整えたい。 ○指導案全体において、時間配分の計画が不十分だった。特に、復習活動や児童の発表時間を十分に確保することで、学びを深めることができたはずだ。各活動にもっと時間をかけ、児童が理解できるまで繰り返すことが重要である。また、既習の単語を使ったゲームなどの楽しい要素を取り入れることで、児童の学ぶ意欲を高めることができるだろう。時間管理の工夫の必要性を感じた。	
5時	目標：誰かのためのランチメニューを考え、食べ物や飲み物の名前を言い、読むことができる。【聞く】 【話す】 【読む】
《学生の振り返り》 ○指導案の振り返りでは、理解が難しい児童への配慮や目標達成に向けた授業構成の不足が課題となった。 ○指導案には、児童のサポートや柔軟な対応が十分に記載されていなかったと反省。指導上の留意点を詳細に書くことで、児童が楽しみながら英語を学べるようにするべきだった。今後は、支援の具体的な方法やパターンも指導案に盛り込むことが必要だと考えた。 ○タイム・ボム・ゲームのルール説明が難しかったため、簡単な単語を使った説明が必要だったと反省。児童が理解しやすいように、classroom Englishを多用し、児童の理解度を確認しながら進めるべきであった。今後はゲーム説明に関しても、わかりやすい工夫を指導案に盛り込むことが必要であることがわかった。 ○“What would you like?”のやり取りでは、楽しくコミュニケーションすることが重要だが、やり取りの人数を指定したことで児童に焦りが生じた。改善策として、人数指定ではなく、やり取りの時間を設定することで、児童が落ち着いて話し合える環境を整えるべきであると反省した。	

6時	目標：ランチメニューを作るために、買い物をすることができる。 【聞く】【話す】【読む】【書く】
《学生の振り返り》 ○聞くことの重要性を強調し、他者とのやり取りを中心に進めたが、英単語の聞き取りに集中できるゲームが不足していた。ビンゴやキーワードゲームを導入することで、児童の集中力を高め、聞く力の向上を図ることができる。また、動作を取り入れたやり取りも有効で、実際のカードを使用することで、児童が英語を「話すこと」を楽しみながら学ぶ環境を整えたいと思った。 ○教室英語の使用について、小学校英語に適していない表現や単語がいくつか見られた。特に難解な表現が多く、児童が内容を理解しにくい場面があったため、簡単な単語や文を使用することが大切だと思った。また、児童の興味を引くためには、活動前に児童に発表させたり、ペア活動を取り入れたりするなど、授業の導入部分を工夫することが大切だと思った。 ○児童の反応を予測し、理解できなかった場合の表現を用意していた点は効果的だった。また、要所で称賛を入れ、児童の意欲を高める工夫もしたが、個々の児童の理解度を把握するための取組は不十分だった。今後は、教師が学級内を巡回し、児童が苦手な発音や表現を確認しながら支援を行うことが必要だと思った。 ○指導案ではスモールステップを意識し、段階的に進めるようにした点はよかった。	
7時	目標：作ったランチメニューが誰のためか、どの食べ物・飲み物を選んだか発表する。 【聞く】【話す】
《学生の振り返り》 ○「Card Swat!」などの活動では、急な発言が児童の理解を妨げてしまう可能性があった。「Let's try again.」などの明確な指示を加えることで、活動がスムーズに進行できると思った。また、ボランティアが複数名出た場合や誰も出ない場合の対応策を、指導案を作成するとき事前に考えておくことで、予期せぬ状況にも柔軟に対応できたと思う。 ○指導案では、ルール説明が児童に十分に伝わらなかった場合の対応策が欠けていた。児童が活動の進行を理解できるよう、ルール説明はゆっくりと繰り返し、別の言い方や日本語を取り入れるなどの工夫が必要である。また、児童が理解できていない様子を確認し、適切にサポートできるよう準備を整えることで、学びの質が向上すると考える。 ○楽しい活動に重点を置きすぎた結果、質の高い学びが疎かになった点が改善点である。インタビュー活動を取り入れたり、クラスの人気食べ物ベスト3を発表したりするなどの工夫を加えることで、児童全員が楽しみながら「聞く」「話す」力を高めることができる授業となる。楽しさと学びの質のバランスを意識した授業作りをしていきたい。 ○作成したランチメニューを発表する活動では、代表者だけが発表する形となっており、全員が発表する機会がなかった。グループ内での発表やインタビュー活動を取り入れることで、全児童に発表の機会を提供し、より多くの児童が「話すこと」の目標を達成できる授業設計が必要だと思った。 ○指導案では、活動後のカード回収や片付けの時間が明示されていなかった。実際の授業では、活動だけでなく、その後の片付けの指示もスムーズに行えるよう、時間配分や片付け手順を明確に指導案に記載することが重要だと考えた。これにより、授業全体の流れが円滑になり、児童も次の活動に移りやすくなると思う。	
8時	目標：綴りを見て単語を認識することができる。「音読み」を聞いて、文字を認識することができる。【聞く】【話す】【読む】【書く】
《学生の振り返り》 ○指導案において、アルファベットの名前と音の違いに気付く活動は良かったと思うが、より効果的な方法として「アルファベット・ジングル」を活用することで、音と文字の結び付きを強化できると考える。また、作った単語をなぞる、書く活動を追加することで、児童が単語に慣れ親しみやすくなり、より深い学習が促進されるだろう。このように、視覚や聴覚を使った多様なアプローチで、児童が学ぶ喜びを感じられる工夫が必要だと思った。	

- 指導案では、教師が主体となってゲームが進行し、児童が話す時間が十分でなかった点が改善点である。児童により多くの発言機会を与えるため、単語の正解発表や読みを全員に確認させるといった工夫が必要である。児童が間違えた際には他の児童に答えさせるなど、クラス全体の学習効果を高めることが重要である。これにより、児童全員が積極的に学び、成長する環境を作ることができる。
- 指導案には、児童が理解できない場合の対応や、学習ペースの異なる児童への支援が明確に記述されていなかった。特に、ルール説明が理解できなかった場合や、間違えた児童に対する対応が不足していた。授業内容の理解が早い児童と遅い児童の双方に対しての適切な指導と支援を記述することで、全ての児童が積極的に授業に参加しやすくなる。これにより、学びの質が向上し、全体的な学習成果が期待できる。
- 「聞くこと」はコミュニケーション能力の基盤であり、時間を十分に確保する必要がある。今回の指導案では、聞く活動がしっかりと組み込まれていたが、「話すこと」の支援に改善の余地があった。児童が自然な発音を身に付け、発言する機会を増やすためには、発音練習や簡単な定型文を使った会話練習の機会を増やし、児童の話す意欲を高めることが大切である。積極的に発言できる環境を整えることが求められる。
- 指導案において、活動を段階的に進める「スモールステップ」の考え方は適切であったが、児童が「読む必然性」を感じられる教材や活動が不足していた。例えば、英語の単語や表現を児童にとって身近なテーマに結び付け、興味を引き出すことで、児童が自発的に学習に取り組む姿勢を引き出せる。また、活動を段階的に進めることで、児童の自信を育み、意欲的な学びを促進できるようになるだろう。

模擬授業を実践した後の学生の学習指導案について、概ね次のようにまとめることができる。

(1) 目標達成や定着のための活動の不足

リピート回数や児童同士がコミュニケーションをとる場面、既習の語彙や表現を使う活動の不足。繰り返しやり取りの時間の設定、より効果的なゲームや活動の実施などを指導案に入れていく。

(2) 児童へのサポートや児童が説明内容を理解できない場合、児童が思うように動かない場合の対応

ゲームの説明や、児童が理解できない場合の対応、学習ペースの異なる児童への支援、想定していなかった動きへの対応等、簡単な単語や文を使用し、学習指導案の指導上の留意点をより詳細に書く。

(3) 各活動の目的の明確化、活動と活動とのバランス

活動の目的がはっきりしていないため、活動のポイントが抑えられないまま進むことに対しての指導案の修正、また、楽しさと学びの質のバランスを意識した授業計画の必要性を感じていた。

(4) 時間配分

授業全体の時間配分だけでなく、活動ごとの準備、片付けの指示までの時間配分についても指導案作成時に考えておくこと。

各授業の目標を意識し、また担当授業では4技能5領域のどの技能をどのような活動を通して身に付けさせるべきかを意識している様子が見て取れる。また、模擬授業後での振り返りであったため、活動の改善、児童への配慮、時間配分、等についての振り返りも見られた。

さらに、教科書として使用した「Q & A 小学校英語指導法事典—教師の質問112に答える—」(編著者：樋口忠彦、発行所：教育出版株式会社、2017)の第4章「授業の進め方—よりよい授業づくりのために—」を参考にしながら、振り返りをしたので、教科書から、課題の改善点についても学び、記述をした学生も多かった。

3. 「模擬授業」の実践における学生の振り返りの概要

「模擬授業の学習指導案」における学生の振り返りの概要と同様に、単元目標及び各授業での目標さらに各授業で4技能5領域の主に何を身に付けるための時間であるのかを次の表に明示した。

[illegible]

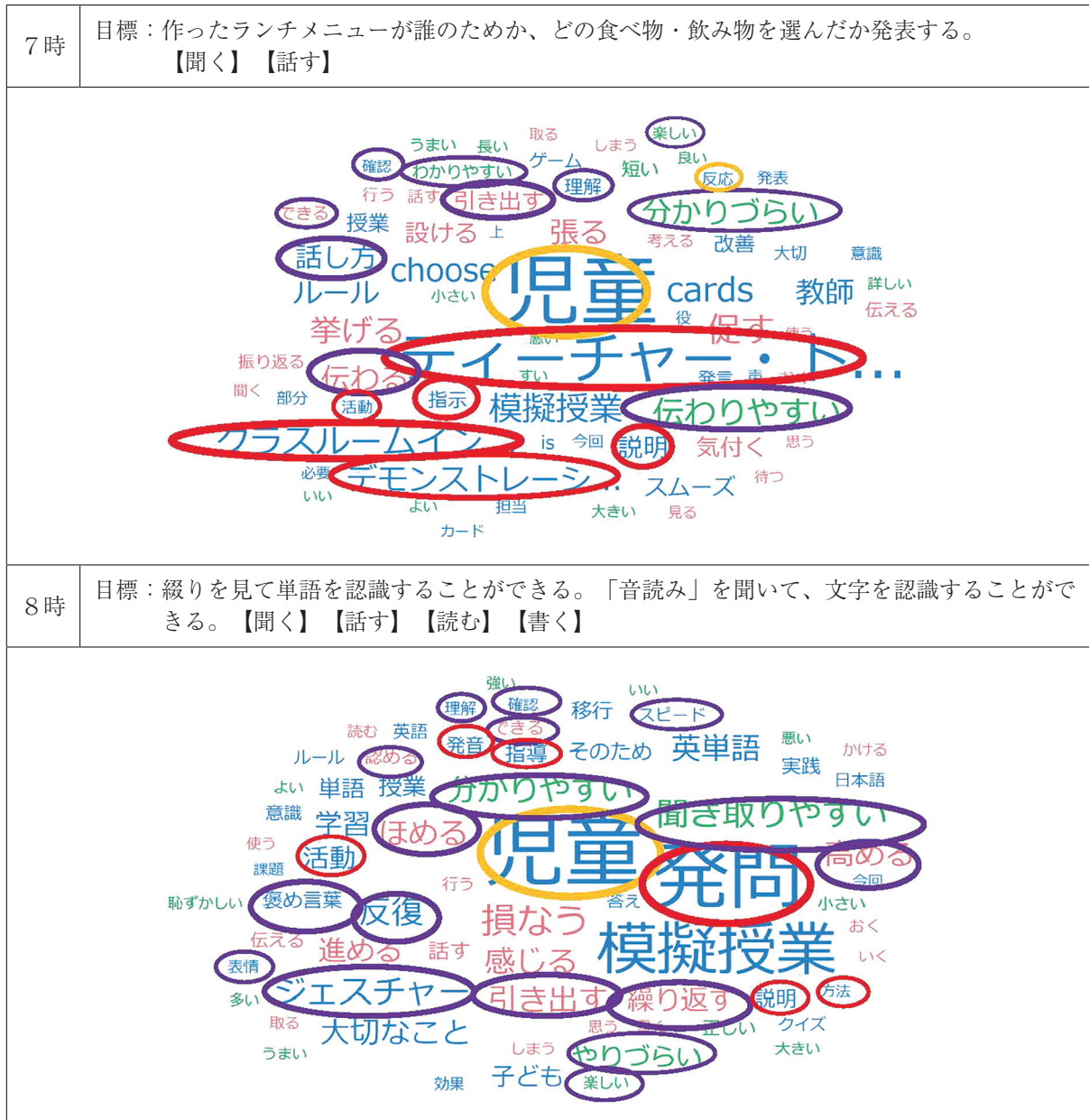


図2 「模範授業」の実践に係る学生の振り返り（AIテキストマイニングによる分析：ワードクラウド スコア順）

「模範授業」についての学生の振り返りを、AIテキストマイニング（ワードクラウド スコア順）で分析したものを、図2として示した。さらに、図2に、「児童及び児童に関連のある単語」に黄色の楕円形の囲み、各授業の「どのような内容に学生が意識を向けたかを表す単語」に赤色の囲み、各授業で「学生が意識した単語及び意識して行動したことを示す単語」に紫色の囲みを入れた。

すべての授業において、学生は児童を中心として、活動や説明、指示、発問、ティーチャー・トークなどが、わかりやすかったか、伝わりやすかったか、楽しかったかを意識し、そうあるために、表情やジェスチャーを加えたり、繰り返しをしたり、児童の理解度を確認したり、ときにはほめたりと、自身の模範授業の姿を振り返り、改善すべき点を記述しているのが分かる。

表5 「模擬授業」の実践に係る学生の振り返り

単元目標： ・食べ物や飲み物の言い方、値段や欲しいものをたずねたり答えたりする言い方を理解することができる。また、絵や音と結びつけながら単語を読むことができる。 ・特別な人へのランチメニューを発表することができる。 ・他者に配慮しながら、特別な人へのランチメニューを発表しようとする。	
1時	目標：いろいろな食べ物や飲み物の表現を理解し、ランチメニュー作りのための発表およびやり取りのイメージを持ち、そのための表現に慣れる。【聞く】 【話す】
《学生の振り返り》 ○単語のリピート回数が少なかったため、児童が表現に十分慣れていなかった。発音練習を繰り返し児童が聞き慣れ、話し慣れる機会を増やすことが必要である。 ○児童の発達段階や理解度に合わせたティーチャー・トークが不足していた。ゆっくり話し、難しい単語の意味を説明することが重要。自分の話し方がどのように児童に伝わっているか、確認を徹底しながら授業を進めるべきだと感じた。 ○授業中、児童同士が英語で会話する場面が少なかった。英語でのコミュニケーションの場を増やし主体的に話す機会を与えることが必要だと感じた。	
2時	目標：いろいろな食べ物や飲み物の表現を理解し、言えるようにする。【聞く】 【話す】
《学生の振り返り》 ○模擬授業では、児童が教師の話す英語を理解して活動に参加できたものの、全員が発言する機会が不足していた。児童の理解を確認しながら進めることが重要で、特にゲームのルール説明時には、児童がしっかり理解できるよう何度も説明を行う必要がある。 ○授業の盛り上がりには欠けた原因として、教師の話す抑揚や表情が大きくなかったことが挙げられる。児童の興味を引きつけるためには、感情を込めた発話やジェスチャーを活用することが効果的であり、明るい雰囲気を作ることで、児童の意欲も高まり、参加意識が向上する。 ○模擬授業では、発表する児童が限られていたため、多くの児童が発言の機会を得られなかった。今後は、食べ物や飲み物の絵カードを増やし、ペアワークを取り入れることで、より多くの児童が自分の意見を表現できるようにしたい。発言の場を増やすことで、児童同士の交流や学びも促進され、活気のある授業になるだろう。 ○模擬授業でのフィードバックが単調であったため、児童のモチベーションに影響を与えた。褒め方を多様化し、“That’s right.”だけでなく“Fantastic!”や “Wonderful!”などのポジティブな言葉を取り入れることで、児童のやる気を引き出せる。また、発達段階に応じた適切な言葉掛けを行うことで、児童の自信を育むことが重要。フィードバックの質を向上させることで、児童の積極的な学びが促進されたと考えた。	
3時	目標：いろいろな食べ物や飲み物を買うときの数字・値段表現を知り、表現に慣れる。 【聞く】 【話す】
《学生の振り返り》 ○模擬授業では教師主導の進行が目立ち、児童主体の学びが不足していた。今後はアクティビティを児童が主導できるように工夫し、彼らの興味を引き出す方法を考えたい。 ○「話すこと」に関しては、アクセントに焦点を当てる工夫が必要である。身体的動作（手を叩くなど）を取り入れることで、児童の注意を引き、理解を深める手助けとなる。また、インフォメーションギャップの活動では説明が不足していたため、ワークシートの使用方法を明確にするためのロールプレイを実施することが効果的だったと思った。 ○授業中に長い英語の説明が必要で、児童の理解が難しい場面が見られた。小学生が理解できるようにするためには、まずジェスチャーを交え、次にゆっくりと説明することが重要で、それでも理解が難しい場合には、日本語を交えて説明することが求められる。授業時間が限られている中で、児童の理解を確保するためには、効率的な説明手法を取り入れることが必要である。	

4時	目標：ランチメニューの食べ物や飲み物の栄養素を考え分類し、表現に慣れる。【聞く】【話す】
《学生の振り返り》 ○授業は元気よく進行し、児童に安心感を与えた点は良かったが、クラスの雰囲気が悪い時の対処が課題。特に「静かに聞こうね」などの効果的な声かけを行わなかった点が反省される。児童が集中していない場面では、視覚や聴覚に訴える工夫が不足していたことが挙げられ、タイマーの使用や、ジェスチャーを加えるなどの具体的な対処法が今後の改善点である。 ○教師の発言が一貫して同じトーンだったため、重要な部分を強調したり、繰り返したりする工夫が欠けていた点が課題である。また、クラスルームイングリッシュや簡単な表現が不足していた。児童の反応に応じて、より分かりやすくゆっくりと発音し、適切な指示を出すことが今後求められる点である。 ○発音指導では、発音が苦手な児童への具体的な説明やアドバイスが不足していた点が課題である。また、口の形や綴りととの一致を確認しながら発音する方法を取り入れる必要があった。	
5時	目標：誰かのためのランチメニューを考え、食べ物や飲み物の名前を言い、読むことができる。【聞く】【話す】【読む】
《学生の振り返り》 ○ティーチャー・トークでは「trace＝なぞる」の意味を伝える際、ジェスチャーのみでは不十分で、児童に十分に理解が伝わらなかった。改善案として、教科書では簡単な単語と短い文を使い、繰り返し強調する方法が効果的だとされている。それでも理解が不十分な場合には、活動を止めて日本語を適宜用いる必要がある。また、声のトーンやジェスチャー、繰り返しを用いて、わかりやすさを重視するべきだった。 ○ペア活動を終わらせるタイミングで、児童の進行具合を十分に確認せずに終了してしまった点が課題である。活動の目的である、児童同士の理解確認の利点が活かされていなかった。改善点として、机間指導を通じて児童の進捗をしっかりと確認し、ペア活動を適切に止めることが必要だと思った。活動の進行状況を把握し、時間配分を意識しながら進めることが今後の課題である。 ○教師の表情や態度、立ち位置が曖昧で、授業中の動きが多すぎた点が課題として挙げられる。特に緊張から、目線が上に向いたり、口の動きが小さくなったりすることで発音が正確に伝わらなかった。教科書では、教師は表情豊かに、児童の反応を見ながら適切な位置に立つことが重要であり、不要な動きを減らし、授業全体を落ち着いて進行させることが改善点として述べられている。	
6時	目標：ランチメニューを作るために、買い物をすることができる。【聞く】【話す】【読む】【書く】
《学生の振り返り》 ○ティーチャー・トークの速度が速く、小学生には難解だった場面があった。特に英語は日本語とは異なるため、教師はゆっくりと間を取りながら話す必要がある。発話を引き出すため、具体物やジェスチャーを用い、表情豊かに繰り返し話すことで、児童の理解を深めることが重要である。簡単な語彙を選び、明確に伝えることが、効果的な指導に繋がると考えた。 ○机間指導の不足が反省点として挙げられる。模擬授業では全体を回ることができていなかったため、困っている児童を適切にサポートする機会が減少してしまった。教師は、児童一人ひとりの状況を丁寧に確認し、曖昧な対応ではなく、具体的なサポートを行うことが求められる。これにより、児童が抱える疑問や問題を早期に解決し、学びの質を高めることができることを学んだ。 ○グループ活動では児童が課題を遂行できていたが、同じペアで全ての活動を行うことで緊張感や多様性が欠けていた。ペアを変え、複数回のやり取りを行うことで、より充実した活動を提供することができたと考える。また、活動の移行に時間がかかり、ざわつく場面が見られたため、事前に注目を引くジェスチャーやセリフを教え、進行を円滑にすることが必要である。 ○児童が正しい発音をした際に十分な称賛ができていなかった。Good job! や Great! などの励ましの言葉を積極的に取り入れることで、児童の自信や活動への意欲をさらに高めることができるので、次回は称賛の効果をより意識して指導に取り組みたい。	

7時	目標：作ったランチメニューが誰のためか、どの食べ物・飲み物を選んだか発表する。 【聞く】 【話す】 《学生の振り返り》 ○模擬授業では、児童にゲームのルールが十分に伝わっていなかった点が課題であった。ルール確認の時間を設けることで、活動の混乱を避けるべきだった。また、教師の指示が不明確で、児童の集中力を妨げる要因となった。これにより、全体の流れがスムーズでなくなり、授業が断続的に感じられた。 ○授業中に児童の反応を適切に観察できていなかった。児童の理解度や反応を見極めることが重要であり、これにより指導方法を調整する必要があった。児童が楽しみながら理解できるような環境作りが求められる。 ○授業の進行において、時間管理が不十分だったため、児童が待つ時間が長くなり集中力が失われた。特に、カードを貼るタイミングでの待機時間が長く、授業がスムーズに進まなかった。次回は、先に基本的なカードを貼っておくなどして、児童が待つ時間を減らす工夫をしたい。授業の流れを把握し、効率よく進行することで、児童の関心を維持することができると考えている。
8時	目標：綴りを見て単語を認識することができる。「音読み」を聞いて、文字を認識することができる。【聞く】 【話す】 【読む】 【書く】 《学生の振り返り》 ○授業中のコミュニケーションでは、全体的に声が小さく、児童にとって聞き取りづらい環境を作ってしまった。発表に対する反応や、間違えた児童への対応が不十分だったため、ポジティブ・フィードバックを意識して児童のやる気を高める必要がある。発話の際は、はっきりとした声で話すこと、話すスピードを調整することが重要だと感じた。特に、児童の興味を引くために話し方にメリハリをつけることが大切だと思った。 ○授業においては、活動の移行時に時間をかけすぎない工夫が求められた。児童の反応を確認することも大切で、理解が得られたかを見極める必要がある。活動の進行をスムーズにするために、ジェスチャーを使った合図を事前に伝えておくことで、移行が円滑になると考える。これにより、児童の集中力を保ちつつ、次の活動へと自然に移行できるようにしたい。 ○ティーチャー・トークの質を高めることは、児童から多くの英語を引き出すために重要である。褒め言葉を多様に使うことで児童の発言を認め、やる気を引き出すことができた。また、活動を円滑に進めるためには、重要なポイントを繰り返し強調し、分かりやすい表現を心掛けることが求められる。児童の様子や表情を観察し、理解度を確認しながら授業を進めることで、より効果的な学びが実現できると感じた。

「模擬授業」の振り返りでは、教師役である自身の指導の様子を、映像を通して振り返ることで、次のような内容が多く見られた。

(1) クラスルームイングリッシュの適切な使用

自身のクラスルームイングリッシュの使用が、児童にとってどうであったかを視聴して、ティーチャー・トークの質を高めること、繰り返しをすること、表情豊かにジェスチャーを加える等の重要性や必要性を述べていた。

(2) 児童への賞賛やクラスの雰囲気をよくするための工夫

児童への励ましや賞賛の言葉掛けの不十分さや児童が騒がしい時や集中できていないときの対処が不十分であったことがあげられていた。称揚のクラスルームイングリッシュや児童に注意を促すようなクラスルームイングリッシュ等を適宜使用することの必要性を述べていた。

(3) 児童全員が活動できる場の設定の必要性

発表などが一部の児童だけのものとなってしまう、すべての児童が活動する機会を設けるべきであったという課題を挙げた学生もいた。ペア活動やグループ活動を入れることにより、全児童が活動できるような場を作ることを改善点として挙げていた。

(4) 児童の理解度を確保することの必要性

ペア活動や机間巡視を行う中で、児童がどのような状況であるかを見て指導すること、またすべての児童が十分活動できていないのに活動を終わらせてしまったことを課題として挙げている学生も多かった。活動の進行状況や児童の反応を看取って授業を進めることの大切さを感じ取っていた。

4. まとめ

「模擬授業においては、学習項目の「指導技術」及び「授業づくり」に関する知識をもとに、学生1人ひとりが授業実践を行う機会を確保することが肝要であり、これまでの実践事例を見ると、学習指導案の作成と組み合わせて扱われることが多い。しかしながら、15回の講義の中で模擬授業に割くことのできる時間は多くなく、特に大人数クラスにおいては全ての学生が授業実践を行う機会を確保するための工夫が必要である。また、コアカリキュラムに示されているように、模擬授業後の振り返りを踏まえて指導案の改善を行うことも重要である。」(粕谷恭子,「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」報告書, 2021, P.63-P.64)と記されている。

今年度行った「小学校英語指導法」の授業において、「学習指導案」及び「模擬授業」についての学生の振り返りから、「指導技術」や「授業づくり」に関する知識をベースにした課題意識が見られ、またその改善についても記述をすることができていた。

「小学校英語Ⅰ」の授業段階から授業実践に必要な英語運用力を身に付けさせ、さらに「小学校英語指導法」の授業で、授業づくりを軸に必要な知識を解説しつつ、指導技術を身に付けさせるコースデザインをし、授業実践をしていることが成果をあげているのではないかと考える。

今後、より授業実践力を培う上で、どのような指導が効果的であるのか、学生個々人の英語力やそのほかの能力によっても効果的な指導は様々であると考え、より効果的な指導について考察をしていきたい。

参考文献・引用文献

粕谷恭子,「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」報告書, 2021